# 「ぼくの友だち」

もやモ屋

## 楽しく学校へいくために

［配慮事項］
※不登校傾向の児童やいじめで悩む児童が番組に登場するため
教師が事前に視聴し学校の状況に合わせた配慮か必要である。

### 1 本時のねらい

いじめはいけないものだと再認識するとともに、正しいと判断をしたことができる清々しさと友だちを守れないときの、うしろめたさを感じつつ、こうありたいという自分の生き方を見つめる。【いじめ対応】

関連項目：正しいと判断したことは，自信をもって行おうとする心情を育てる。（善悪の判断，自律，自由と責任）
友だちと互いに理解し、信頼し、助け合うおうとする心情を育てる。（友情，信頼）

### 2 本時の展開

| 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| **1** 生活と教材をつなげる。【4分】 | |
| **発問①**「ついつい友だちに合わせてしまうことはありますか？」 | |
| ・「〜だよね。」と言われたら、合わせちゃう。<br>・でも、違っても大丈夫なのが、友だちだよね。<br>♥ みんなに合わせなきゃって思うときあるよね。<br>♥ 違っていいと言っても、自分だけ違うのは嫌。 | ・子どもの生活経験を振り返りながら感じた思いを、実名を出さずに、語り合うようにする。板書 1<br>・同調圧力を感じていることを表出させるとともに、その裏にある「でも、本当は…。」という圧力を嫌う思いも十分に出させたい。 |
| **2**「ぼくの友だち」を視聴して、「問い」について話し合う。【10 分】 | |
| **発問②**「もやもやしたところはどこですか」と感想を語り合いながら、問いをつくる【8分】 | |
| ・3 人でいじめていて、ひどいと思った。<br>・エイキくんがせっかく学校に行ったのに、たっくんがいじめられてて、かわいそうだった。<br>・最後に「おまえ、こいつの友だちなの？」って言われて、どう答えるのかもやもやした。 | ・場面絵を活用しながら、問題場面を整理する。板書 2<br>・いじめのシーンを見て「許せない」という思いを存分に表出させクラス全体の思いとしてしっかり共有したい。板書 3<br>・子どもたちがもった問題意識から、追究したい問いを生み出すように、発言を板書に位置付けていく。 |
| **発問③**「問いについて考える」【15 分】 → ワークシート | |
| **問い**：「もしも自分だったら、どうする？」（投影的な問い）板書 4<br>（実態によって「エイキくんは、何に迷っているんだろう」というような共感的な問いでもよい） | |
| ◆ 友だちを守りたい心　正しいことをしたい心 ◆<br>・友だちだって言う！（言いたい！）<br>・先生を呼びに行く<br>・一緒に片付ける。だって、友だちだもん。<br>◆ 正しいことをしたくても、できない心 ◆<br>・友だちだって言えないかも…でも、勇気を出したいな。<br>・言いたいけど、自分もやられそう。でも、それだと、友だちをうらぎってしまう。<br>・逃げてしまうかも…だって、こわいもん。<br>♥ 友だちを守りたいよな。いじめっ子に負けたくないよな。でも、いじめは怖いかも…。 | ・方法論に終始することが無いように、心がけたい。そのためには、行動の背景にある「心」に目を向けさせる。<br>・「正しいことをしたい気持ち」と「できない気持ち」に分けながら、「このときの気持ち」を板書として整理する。板書 5<br>・先生を呼びに行くという行動の背景には、「友だちを守りたい！」「いじめをやめさせたい」という気持ちが表れており、それらも勇気ある行動として認めていきたい（傍観者にならないように）。<br>・途中で「いじめている人が悪い」という声が出たら、いじめは絶対に許さないという雰囲気を共有しつつ、問いに関する議論に戻る。<br>・すぐにできるようになるかどうかわからないけど、「こういう場面で大切にしていきたいこと」をみんなの言葉で整理する。板書 6 |
| **3** 学びを整理する | |
| **発問④**「今日の学びから、今の自分となりたい自分について考えてみましょう。」【8分】 → ワークシート | |
| ♥ 僕は、いじめなんか絶対にしない人になりたい。<br>♥ 今すぐはできないかもしれないけど、止められる勇気をもてるようになりたいな。<br>♥ 友だちを守ったり、大切にしたりできる人になりたいな。 | ・発問④について、考えが整理できた子から尋ね歩き交流をすることで、友だちの多様な考えに触れられるようにする。<br>・こうなりたいという気持ちを取り上げ、背中を押してあげたい。<br>・新たな気付きを、赤で追記するように伝えておくと、対話の中での学びを見える化することができる。 |

指導案作成：安井政樹（札幌国際大学　准教授）